

## 霞ヶ浦が育てた水彩画家

大きな湖と高い山は、見る人に深い感銘を与える、という。本県には滋賀県の琵琶湖に次いで大きな霞ヶ浦がある。湖岸に立つと、遠くまで広がる海のような風景が飛び込んでくる。深い息の一つやふたつ自然に出てくる景色だ。

霞ヶ浦が与えるそんな印象を「原風景」に、水彩画の道を究めた人物がいる。水彩画家として初めて日本藝術院の会員となった小堀進(1904-1975)である。水郷の自然豊かな景色を生み出した霞ヶ浦と共に生きた画人であった。

小堀は、明治37年(1904)、行方郡大生原村大賀(現潮来市大賀)に父八十次郎、母まさの長男として生まれた。家は農家であった。地元の尋常高等小学校を卒業後、千葉県立佐原中学校(現千葉県立佐原高等学校)に進学。

佐原中学校を卒業した小堀は、大正11年

(1922)、東京にあった「葵橋洋画研究所」に入所。教授の中心にいた人物は、後に「近代洋画の父」といわれた黒田清輝であった。同研究所では廃校となった翌年まで黒田の下で学んだ。

大正12年(1923)、郷里に戻った小堀は、代用教員などをしながら結婚、家庭を持った。しかし、昭和4年(1929)、小堀一家は、住み慣れた郷里を離れ、東京に移住した。

本格的に絵を描くためだった。

決断した背景について『小堀進遺作展』図録の中にこのような記述がある。「父の死後、母の理解と鼓舞によって郷里の田畑、屋敷を処理し」。不退転の決意で上京したことがうかがえる内容である。25歳の決断だった。

描く絵のジャンルも転機を迎える。複数の年譜は、昭和7年(1932)の事跡に「前年より水彩画に転向、第9回白日会展に出展した

# 小堀進

*Kobori Susumu*

『うすれ日』が初入選」とある。この頃から本格的に水彩画を手掛けるようになった。

以来、小堀は水彩画一筋の画人となる。

発表の場は、戦前が民間美術団体・白日会主催の「白日会展」や公益社団法人二科会主催の「二科展」が中心となった。

戦後は、公益社団法人日展主催の「日展」に、自然をテーマとする作品を次々と発表した。昭和44年(1969)には、改組日展で理事に選出。また、改組日展の第一回日展で小堀は、水郷をモチーフとした「初秋」を発表する。

この作品が翌年、日本藝術院賞に選ばれた。青と白を基調にした色彩で単純化された自然の景色は、見る人に広大な空間に引き込まれるような錯覚を与える。

「初秋」は文字通り、小堀作品の代表作であり、多くの図録の表紙を飾っている。

小堀は「絵即人間」という表題で絵に対する思いを書いている。「作品は自分がかくせない世界だけに、人間としての完成が作品を左右することを思う時、上手な画家よりは

よき人間としての勉強が優先するものと考えている」(『～水彩画の巨匠～小堀進記念展』)。(文中敬称略)

主な参考文献

『小堀進遺作展』(昭和63年、茨城県立美術博物館発行)。『日本の水彩画7小堀進』(平成元年、第一法規出版(株)発行)。『～水彩画の巨匠～小堀進記念展』(平成16年、水郷潮来美術館建設研究会発行)。



潮来市立図書館前に建立された小堀進の銅像＝潮来市牛堀(写真：筑波総研株)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「絵即人間」